HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<資料紹介>ピョートル・チャアダーエフ「狂人の弁明」(訳・解説)
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Citation	スラヴ研究, 25, 149-165
Issue Date	1980
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5100
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113080.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

狂人の弁明

ピョートル・チャアダーエフ著

外川継男訳

（解　説）

I 『狂人の弁明』のテキストについて

チャアダーエフの創作活動は，これを大きく四つの時期に分けることができる。

(1) 1829–31 年。これは八編から成る『哲学書簡』の執筆時期にあたる[1]。

(2) 1832–37 年。この時期を代表するものとしては，1832 年の『ベンケンドルフ伯にあてた覚書』，1833 年に友人たりしアレクサンドル・ツルゲーネフにあてた一通の書簡，及び同人にあてた 1835 年の二通の長文の手紙，そして 1836 年 11 月半ばから翌年 1 月半ばまでの間に執筆されたと推測される『狂人の弁明』があげられる[2]。

(3) 1846–48 年。この期のものとしては，まず 1846 年にフランスの友人たるアドルフ・ドゥ・シルクール伯へあてた書簡，ついで 1848 年 7 月に書かれたと考えられる詩人チュッチェフにあてた手紙，さらに 1848 年の革命と関係のある，幾多の問題を含む「檄文」がある[3]。

(4) 1854 年。この年 1 月 15 日の日付の論文『ユニヴェール』及び，この年秋に執筆されたと推測される『未知の男性より未知の女性にあてた手紙からの抜粋』と題される書簡体の論文[4]。

以上のほかに，『哲学書簡』の執筆時期から，最後の『ユニヴェール』の時期までにわたって，折にふれて書きつがれた『断章と随想』[5]を付け加えるならば，現在まで公刊された，チャアダーエフの主要な作品は，ほぼ網羅されていると言ってよいであろう。しかしこのほかにも，ソ連のレーニン図書館やプーシキンスキー・ドーム（ロシア文学研究所）等には，幾多の未刊の書簡や断片が存在することが知られている[6]。

チャアダーエフが生前に公刊することができたのは，以上の作品中，1832 年に『テレスコープ』の第 11 号に掲載された，『断章と随想』のごく一部[7]と，1836 年 9 月に同じ『テ

1) 拙稿「哲学書簡—翻訳と解説 I–IV」，『スラヴ研究』No. 6–9，1962–65 年参照。
2) 拙稿「『哲学書簡』から『狂人の弁明』へ」，木村彰一編『ロシア・西欧・日本』，1976 年，321–338 ページ参照。
3) 拙稿「1848 年の革命とチャアダーエフの逆説—バーリンのチャアダーエフ像への反論として—」『スラヴ研究』No. 21，1976 年，55–81 ページ参照。
4) 拙稿，上記 3) 及び「ロシアとヨーロッパ—チャアダーエフの歴史哲学をめぐって—」柴田三千雄・成瀬　治編『近代史における政治と思想』，1977 年，251–284 ページ参照。
5) これは『スラヴ研究』No. 23，1979 年，1–52 ページに，初めて公刊された。
6) シャホフスコーイは，1935 年に，チャアダーエフの新たな著作集の準備が進められていると言ったが，これは出版されずに終った。*Литературное наследство*, тт. 22–24, М. 1935, стр. 8–9.
7) これには，Нечто из переписки НН という題が付されている。

レスコープ』の第15号に掲載された『哲学書簡（第一書簡）』の二篇だけであった。

『狂人の弁明』が初めて公刊されたのは，著者たるチャアダーエフの死後6年たった1862年のことであって，この年イエズス会の司祭ガガーリン[1]が，パリとライプツィヒでチャアダーエフの『選集』[2]を編集・発行した。その後，1908年に，ゲルシェンゾンはチャアダーエフの伝記を著わし，その付録にこのガガーリン版の『狂人の弁明』を，フランス語から露訳して収めた[3]。さらに彼は，1913年から14年にかけて，二巻から成るチャアダーエフの『著作・書簡集』を編集・発行したが，その第一巻にガガーリン版のフランス語の原文[4]を，そして第2巻に，ガガーリン版よりも早い時期に書かれたと推測されるヴァリアント[5]を収録した。

この両者を比較すると，そこにはつぎのような相違が見出される。

まずガガーリン版（及びそれに依拠したゲルシェンゾン版の第1巻）に収められた『狂人の弁明』の冒頭には，

《O my brethern! I have told
Most bitter truth, but without bitterness》
Coleridge

という三行のエピグラフが掲げられている。これに対し，ヴァリアントでは《Adveniat regnum tuum（御国の来たらんことを）》という，マタイ伝の一句が記されている。

つぎに，ガガーリン版においては，末尾近くで，チャアダーエフが『哲学書簡（第一）』の至らなかった点として，「ピョートル大帝の偉大な魂と，ロモノーソフの普遍的な精神と，プーシキンの優雅な才能」とを生み出したロシア国民に絶望したことをあげているのに対し，ヴァリアントには「ロモノーソフ云々」以下が欠如している。しかし，より大きな相違は，以下の和訳の末尾に見られるように，ひとりガガーリン版のみに，約一ページにわたる文章が存在し，しかもその最後の数行は，『狂人の弁明』の第二章の冒頭にあたるという点である。これは，わずか数行にすぎないが，ロシアの歴史を考える上で，チャアダーエフが最も重要と考えた三つの要素，即ち，地理的要素と宗教的要素と農民の隷属[6]の中の，第一の地理的要素を指摘した重要な箇所である[7]。

『狂人の弁明』の新たなテキストは，その後半世紀たって，1966年にアメリカの学者レイモンド・マックノーリーによってドイツの学会誌に発表された[8]。彼はレニングラード

1) ガガーリンの経歴については，Ch. Quénet, *Tchaadaev et les lettres philosophiques: Contribution à l'étude des idées en Russie*, Paris, 1931, P. XI, n. 1 及び Michel Cadot, *La Russie dans la vie intellectuelle française 1839-1856*, Paris 1967, p. 88, n. 165 参照。
2) *Oeuvres choisies de Pierre Tchaadaïef publiées pour la première fois par le P. Gagarin de la Compagnie de Jésus*, Paris-Leipzig, 1862.
3) М. Гершензон, *П. Я. Чаадаев. Жизнь и мышление*, С-Пб., 1908, стр. 280-296.
4) *Сочинения и письма П. Я. Чаадаева*, под. ред. М. Гершензона, т. I, М. 1913, стр. 219-237.（以下 *СП* と略す）。
5) *СП*, т. II, стр. 29-40. ゲルシェンゾンは，これを科学アカデミーの『ツルゲーネフ兄弟のアルヒーフ』の中に見出した。
6) 拙稿「ロシアとヨーロッパ」，280ページ参照。
7) これはカラムジンの影響であると推測される。拙稿「『哲学書簡』から『狂人の弁明』へ」，330-331ページ参照。
8) *Chaadaev's Philosophical Letters Written to a Lady and His Apologia of a Madman*

のロシア文学研究所（プーシキンスキー・ドーム）に保存されている二つの手稿を比較検討し，そのうちチャアダーエフ自身の手によって訂正が加えられた原稿 (F 357/Op 2/No. 408) をもって，そのテキストとして発表した[1]。ついで1970年に，フランスのイエズス会の司祭フランソワ・ルーローが，マックノーリーと同じ手稿をもとに，『狂人の弁明』を公刊した[2]。これはマックノーリーのテキストにしばしば見られた原稿の読み誤りを正したもので，現在までのところ，もっともすぐれたものと考えられる。したがって，以下の邦訳は，このルーローのテキストを底本とし，それに上記ガガーリン版（ゲルシェンゾン版第1巻）や，ゲルシェンゾン版第2巻のヴァリアント，さらにマックノーリー版を参照した[3]。

このマックノーリーやルーローの用いた手稿には，ガガーリン版及びゲルシェンゾン版のヴァリアントには入っていない何行かの文章が含まれている。その内容は，著者たるチャアダーエフが，『哲学書簡（第一)』が印刷される前に，広く人びとに読まれていた時にはまったく非難がましい批評を受けなかったにもかかわらず，ひとたび活字になるや，世人の囂々たる非難を浴びるに至った事実を，幾分愚痴っぽく語っている箇所である。この部分は，『狂人の弁明』の執筆の動機を考える上で無視できないところである。しかし，このマックノーリーやルーローの用いた手稿にも，ゲルシェンゾン版のヴァリアントとまったく同じく，末尾の部分が欠如しており，マックノーリーはこの部分を欠けたままでテキストを編集したが，ルーローはガガーリン版からこれを補っている。以下の邦訳においても，上述の理由から，この箇所を補充した。

II 『狂人の弁明』の成立事情

『狂人の弁明』がいかなる状況のもとに執筆されたかについては，チャアダーエフ自身の手になるつぎの五つの資料から，直接うかがい知ることができる。その第一は，1836年11月8日付のセルゲイ・ストローガノフ伯にあてた手紙[4]であり，第二は，同年11月17日付の供述書[5]。第三は，同年末ごろと推定される，友人アレクサンドル・ツルゲーネフへの手紙[6]。第四は，翌1837年，兄ミハイルにあてた手紙[7]。そして最後は同年10月19日付でシベリアに流されていた友人たりしデカブリスト，イワン・ヤクーシキンにあてた

edited by Raymond T. McNally, 《Forschungen zur osteuropäischen Geschichte》 Band 11, Berlin, 1966, pp. 109–117.

1) もう一つの手稿は同じプーシキンスキー・ドームに保管されている F 309/Op 2/No. 2688 で，これは，かつて『ツルゲーネフ兄弟のアルヒーフ』にあったものである。この手稿が誰の手によるものであるかはわかっていない。*ibid.*, p. 124.

2) Pierre Tchaadaev, *Lettres philosopiques adressées à une dame, présentées par François Rouleau*, Paris,1970, pp. 199–211.

3) このほか，マックノーリーとゼルジンの英訳も併せて参照した。R. T. McNally, *The Major Works of Peter Chaadaev*, University of Notre Dame Press, 1966. Peter Yakovlevich Chaadayev, *Philosophical Letters & Apology of a Madman*, Translated with an Introduction by Mary-Barbara Zeldin, The University of Tennessee Press, 1969.

4) *СП*, т. I, стр.194–196.

5) *Там же*, стр. 197–199.

6) *Там же*, стр. 199–201〔これはフランス語で書かれ，署名の代りに Le fou（狂人）とある。〕

7) *Там же*, стр. 203–205.

手紙[1]である[2]。

『哲学書簡』(第一)』は，1836年9月，ナジェージヂンの編集する雑誌『テレスコープ』の第15号に掲載されたが，これはフランス語の原文のロシア語訳であって，しかも無署名であった。著者たるチャアダーエフは，すでにこの5年前の1831年6月に『哲学書簡』全八編を書き上げており，それは印刷されない原稿の形で，プーシキンをはじめ，彼の友人たちの間で広く読まれていた。彼はこの論文が印刷されるとは考えておらず，『テレスコープ』に掲載されるのを知ったのも，検閲が通って，ようやく校正刷が出たあとのことであった（供述書)。

周知のように，この論文を掲載した咎により，発行者のナジェージヂンと検閲官たりしモスクワ大学総長ボールドィレフは直ちにペテルブルグに召換され，喚問のあと，ナジェージヂンはヴォログダ[3]へ流刑処分となり，ボールドィレフは罷免された（兄ミハイル及びヤクーシキンへの手紙)。一方，著者たるチャアダーエフは，官房第三課の家宅捜査を受け，書類を没収された後，10月28日[4]に警視総監の許に出頭を命ぜられ，皇帝ニコライ1世の命として，公式に「狂人」たる旨を告げられた（兄ミハイルあて手紙)。

さらにチャアダーエフの許には，当局の命を受けた医者が，毎日この「狂人」の往診にさしむけられたが，その中の一人の軍医は，酔っぱらってやって来ては，長時間チャアダーエフに悪罵を浴びせて，その「患者」を悩ませたという（同上)。アレクサンドル・ツルゲーネフの語るところによれば，チャアダーエフの面には，突如としてしみがあらわれ，彼は傷悴して，めっきり痩せてしまったという[5]。この医師の毎日の往診は，間もなく間断のものに代わったが，それでも警察と医者の監視は翌1837年の10月まで続き，この時になってはじめて，今後一切執筆しない（即ち公刊しない）との条件つきで，ようやく監視がとかれた[6]。

『テレスコープ』が発禁となり，チャアダーエフが「狂人」の宣告を受けたことは，ただちにセンセーショナルなニュースとなって広く知れわたった。そして『哲学書簡（第一)』はコピーされて，多くの人びとに読まれた。しかもそれは，首都のみでなく，普段この種の「トールストイ・ジュルナル」を読んだことのない地方の人たちの間においてもあらそって回覧されたという[7]。

この『哲学書簡』の評価と，当局の措置に対して，世論は大きく二つに分かれた。大部分の人間は，この論文の内容を非難し，当局の措置を当然のこととして是認したが，ホミャ

1) *Там же*, стр. 205–208.
2) この時期のチャアダーエフの思想に関して論ずるならば，アレクサンドル・ツルゲーネフにあてた1837年10月30日付の手記と翌1838年の長文の書簡も無視することができない。尚，後者はゲルシェンゾン版では1837年とされているが（No. 72)，ソ連の学者シュクリーノフは38年としている。П. С. Шкуринов, *П. Я. Чаадаев, жизнь, деятельность, мировоззрение*, М., 1960, стр. 108.
3) より正しくは，最初ウスチ・スィソリスクへ，ついでヴォログダに流された。
4) 兄ミハイルあて手紙による。なおゲルシュンゾンは11月1日としている。Гершензон, *указ. соч.*, стр. 138–139.
5) Quénet *op. cit.*, p. 257.
6) Гершензон, *указ. соч.*, стр. 139. しかし，アレクサンドル・ツルゲーネフは，友人への手紙で11月になっても毎日医師の往診が行われていると書いている。Quénet, *op cit.*, p. 257.
7) Quénet, *op cit.*, p. 258.

コーフやバラトゥインスキーのように，論文の内容には反対しながらも，政府のやり方を認めることもできないところから，『哲学書簡』に対する反論を書くことを思いとどまった者もいた[1]。おそらく，『哲学書簡』のもつ歴史的意味を最初にさとり，さらに政府の措置に最もはげしいいきどおりをおぼえたのは，流刑先のヴィヤトカにいたゲルツェンであろう。彼はこの論文を初めて読んだ時の衝撃を，繰返し書いているが，しかしこのように感じた者は決して多くなかった。

一日一度，散歩に出るほか，終日家にひきこもって，「とり返えしがつかぬほど多くのものを失なってしまった」と感じたチャアダーエフの許にも，アレクサンドル・ツルゲーネフやドミトリエフのように，彼の身を案じて，時折り訪ねて来る友人がいた。しかしチャアダーエフ自身は，自分とつき合っていた人びととの「多くの関係が断たれてしまった」ことを嘆かないではいられなかった（兄ミハイルあて手紙）。

このような状況の中で，彼はストローガノフ伯へ手紙を書き送ったが，われわれはこの中に『狂人の弁明』の執筆の動機をうかがい知ることができる。チャアダーエフは，先に発表された『哲学書簡』の中には，「現在なら言わないであろう多くのことが含まれている」として，その例として，(1) カトリシズムに対する高い評価は，現在では低いものに変わっていること。(2) ロシアに欠如していると考えた要素が，今では，ロシアの将来の基礎となるかも知れないと考えるようになったこと。(3) ロシアの孤立した状況を，現在ではこの国の最も著しい社会的特徴であると考えており，さらには「われわれの今後の成功の基礎」とさえ見なすようになってきたこと。(4) ロシアの歴史の素晴しいページは，どれひとつを取ってみても，この国の宗教たるロシア正教に負うものであって，それは現在では，自分の理論体系の支柱にすらなるかも知れない，と述べているのである。そして，その上で，『哲学書簡』で述べた見解は，「6年以前」のものであって，現在の見地からすれば，それはあまりにも抽象的であり，辛辣にすぎたとして，「今日の観点から同じ問題を考察した上で，自分自身の論文に反論することに決心しました」と伝えている。

このような執筆の動機については，チャアダーエフは『狂人の弁明』の中でも以上のようにまとまった形ではないが，繰返し述べている。おそらく，少なくとも当初の動機は，いま見たように，『哲学書簡』以後の自分の見解を，まったく公表するあてのないまま，記してみようということにあったものと考えられる。これは，『哲学書簡』と『狂人の弁明』とをつなぐ，『ベンケンドルフ伯にあてた覚書』や，ツルゲーネフに書いた三通の書簡を読めば，いっそう明らかになるところである[2]。しかし彼の他の未完の論文がそうであったように，『狂人の弁明』を書きつづってゆくうちにチャアダーエフは，単なる「弁明」の域を越えて，自分の論敵たる「狂信的なスラヴ人」たちに対する反論へと議論を発展させていったことがうかがわれる。

この『狂人の弁明』が決して単なる弁明ではなく，かなり屈折した形ではあるが，チャアダーエフの信条を述べたものであることは，本解説の冒頭に述べた第三，第四の時期の作品に徴してもたしかなところである[3]。

1) *ibid.* p. 258.
2) 拙稿「『哲学書簡』から『狂人の弁明』へ」参照。
3) 拙稿「ロシアとヨーロッパ—チャアダーエフの歴史哲学をめぐって—」参照。

外川継男 訳

狂人の弁明

Adveaiat regnum tuum[1]

「愛はすべてを忍び，すべてを信じ，すべてを耐える」[2] と使徒パウロは申しています。しからば，すべてを忍び，すべてを信じ，すべてを耐え，慈悲ぶかくあろうではありませんか。しかしまず最初に，以下のことは申しておかねばなりません。それは，つい先頃，私の哲学的存在を打砕き，全生涯の仕事を吹き飛ばしたあの破局[3]が，私の論文の出版に際して湧きあがった囂々たる非難の不可避的な結果であったということです。しかし同時にまた，あの論文の辛辣な文章は，世人のかまびすしい抗議以外の何ものかを受けるに価するものであったということも，申しておかねばなりません。所詮，政府は，そのなすべき義務を果たしたにすぎません。いや，私に対して政府がとった処置は，まったく寛大であったとさえ，いうことができましょう。なぜなら，それは，大衆の期待以上のものでは決してなかったからです。いかに好意的な政府といえども，大衆の欲するところに従うこと以外に，いったい何ができるでしょうか？　しかし大衆の非難の叫びについては，これはまったく別のことだと言わねばなりません。人が自分の国を愛する仕方はさまざまです。たとえばサモイェード人は，自分たちを近視にした故郷の雪を愛しています。このような，生涯の半ばを煤で汚れた小屋の中でちぢこまって過ごし，トナカイの古くなっていやな匂いのする脂と吐気のするような環境を愛している彼らが，あの光栄ある島国の高い文明と制度に誇りをもっているイギリス人と同じ流儀で自らの国を愛するなどということは，絶対にありえないところです。またわれわれにしたところで，もし今なお生まれた土地を，サモイェード人と同じように慈しんでいるとしたら，これは少々情ないことだと言わねばなりますまい。

祖国への愛は美しいものです。しかし，それ以上の何ものかがあります。それは真理への愛です。祖国愛は英雄を生みますが，真理への愛は，賢者や人類の恩人を生み出します。祖国愛が諸国民を分裂させ，憎悪をはぐくみ，時には地上を喪服で被うのに対し，真理愛は文明を広め，精神の喜びを生み，人間を神に近付けます。人間が天国へ昇るのは，決して愛国心の道によってではなく，真理の道を通ってなのです。われわれロシア人の間に，真理を愛する者がほとんどいないことはたしかです。われわれには，そのような人の例が欠如しています。したがって，何が真理で何が偽りであるかについて，あまり心を煩わすことのなかった国民が，自分たちの欠点に対する多少辛辣な批判にあれほどひどく腹を立てたからといって，それを深く恨んではなりますまい。私は，自分に長いあいだ爪を隠していた親しき大衆に対して，露ほどの恨みも持っておりません。私は，いささかの苛立ちもなしに，冷静に，自分の奇妙な立場を理解しようと努力しています！　狂人たるこ

1)「御国の来たらんことを。」『マタイ伝』，IV，10。チャアダーエフは『哲学書簡（第一）』の冒頭にもこの句をかかげている。

2)『コリント前書』，XIII，7.

3)『哲学書簡（第一）』の発禁処分とチャアダーエフに対する「狂人」の宣言をさす。

とを余儀なくされた人間は，自らの仲間や同胞や神との関係において，いかなる立場にあるかを，自分自身に説明すべきではないでしょうか？

かつて私は，一度たりとも大衆を重視したことがありませんでした。民主的趣味などいささかも持ち合せぬ私は，大衆の喝采を浴びようと努めたり，大衆の判断を重んじたりしたことは，一度もありませんでした。いつでも私は，人類というものはその選良に従ってのみ，自らを導くように使命を託された人びとに従ってのみ，進むことができるのだと考えてきました。現代のある大作家[1]が信じたように，一般的理性が絶対的理性だとは，決して考えませんでした。私は大多数の人の本能は，孤立した人の本能よりも，必然的によりエゴイスチックで，偏見をもち，偏狭であり，またいわゆる民衆の良識なるものも，決して良識ではなく，真理は数字で表わすことができないと考えてきました。要するに私は，常に，人間の英知は自らの存在の中心でもあれば太陽でもあるところの孤独な精神の中で，はじめてその全貌を現わすものだと信じてきたのです。かつて一度たりとも大衆に賛同を求めず，大衆の愛顧を受けず，かつまた彼らの気まぐれに苛立つこともなかったこの私が，それでは，どうして突如として，怒れる大衆に面と向うことになったのでしょうか？　私は自分の考え[2]を世人に告げたいとは思っていませんでした。また繰返し申しましたように，私のこの考えは当代の人びととは何の関係もなく，もっぱら私はそれを，自分の確信の形で，われわれよりも学識のある将来の世代に伝えたいと思っていたのでした。それなのに，どうしてこの半ば世間に知られた考え[3]が，ある日突然その足枷を外し，僧院から抜け出て[4]，唖然とした大衆の只中に躍り出たのでしょうか？　実のところ，私にはその理由を説明することはできませんが，以下のことは完全な確信をもっていうことができます。

三百年来ロシアは，西洋と一体化しようと渇望してきました。この国は自分が西洋より劣ることを認め，すべての思想，すべての教育，すべての喜びを西洋から引き出してきたのです。過去百年についていえば，ロシアはそれ以上のことを為してきました。百年前に，われわれの君主の中でも最も偉大な君主[5]が，全世界の前に古きロシアを敢然と放棄しました。この君主こそ，われわれの光栄であり，われわれの半神であって，彼はわれわれのために一つの新しい時代を開いたのです。今日われわれの持っている偉大さも，あらゆる幸も，すべて彼のお蔭なのです。彼はその力強い息吹きでわれわれの古い全制度を一掃し，われわれの過去と現在の間に深淵を穿ち，その中にわれわれの全伝統を一緒くたに放り込みました。彼は自ら卑賤な者に身をやつして[6]西洋へおもむき，わが国で最も偉大

1) シャホフスコーイは，チェルスィシェフスキーの持っていた『狂人の弁明』の原稿の書き込みから，これをラムネーだと断定している。*Литературное наследство*, Т. 22–24, М. 1935, стр. 71. なお McNally も Rouleau もこのシャホフスコーイの説を認めている。

2) チャアダーエフが『哲学書簡（第一）』で述べた考えをさす。

3) 『哲学書簡』は出版される前に，そのフランス語の原稿がプーシキンはじめ，友人たちの間はひろく読まれていた。

4) 『哲学書簡』執筆当時のチャアダーエフの孤独な生活環境をさす。

5) ピョートル大帝をさす。チャアダーエフのピョートル大帝に対する評価の変化については，拙稿「『哲学書簡』から狂人の弁明』へ」，326–330 ページ参照。

6) 1697 年，25 歳の青年ピョートル 1 世は，ピョートル・ミハイロフという偽名を用いてヨーロッパ派遣使節団に加わり，オランダやイギリスなどで新知識を得て，1 年 3 カ月後に帰国した。

な人物となって戻ってきました。西洋の前にひれ伏した彼は，われわれの師となり，立法者となったのです。彼はわが国の慣用的語法の中に西洋の語法を導入し，われわれの表記法を西洋のそれにならって変え，われわれの父祖の衣服を軽蔑して，西洋の衣服を身にまとわしめました。さらに彼は，新しい首都を西洋風に命名し[1]，自らの世襲の称号を棄てて西洋風の称号[2]を採用しました。最後に彼は，自分自身の名前すら放棄して，西洋流の名前で署名さえしたのです。その時以来，われわれの視線は常に西洋に向けられ，われわれはもっぱらそこから来る香気を吸収し，それを養分としてきました。以来わが国の君主たちは，常に国民の先頭に立って，たとえ国民の意志にさからっても，われわれを完成の道へと引っ張ってきたのです。彼らはまったく動こうとしなかったこの国を，たえず先に立って牽引し，西洋の風習や言語や栄華をわれわれに強制しました。われわれは西洋の本によって読むことを学び，西洋の人たちから話すことを教わりました。われわれ自身の歴史についても，それを教えてくれたのは西洋でした。われわれはあらゆるものを西洋から汲み取り，全西洋を翻訳し，ついには自分たちが西洋に似ていれば幸福に思い，彼らが自分たちを仲間のうちに数えてくれれば光栄に感じたのです。

このピョートル大帝の創造が見事であったことは認めねばなりません。われわれに道を示したこの天才の思想は，それ以後われわれがこの道をたどらねばならなかったほど，素晴しいものだったのです。彼がわれわれに語った以下の言葉には，深い意味がふくまれています。「諸君は彼処に，何世代もの人びとが，多くの汗を流した労働と学芸の成果である文明を見るであろう。もし諸君が，自らの迷信から脱し，偏見を棄て，野蛮な過去への執着を断ち切り，無知のうちに過した何世紀かを誇ることなく，諸国民の事業と全世界の人間精神の獲得せる富とを，自らのものにせんと渇望するならば，すべてそれらは諸君のものになるのである」。この偉大な人物が働いたのは，決して自分の国民のためばかりではありませんでした。神の摂理によって選ばれた人間は，いつも全世界のために遣わされた者です。あたかも大河が広大な国土を潤し，やがて大洋に注ぎ込むように，このような人物はまず一国民の求めによって現われ，ついで全人類のなかに呑み込まれるのです。玉座と祖国をあとにして文明国民の最後列に身を隠した時に，彼が全世界に示したユニークな光景は，祖国という狭い枠から脱して，人類という広い領域に身を置くことを望んだ天才の，新しい努力以外の何ものでもなかったのです。われわれが学ばなければならなかったのは，まさにこのような教訓だったのです。実際に，われわれはこの教えを役立てて，今日まで，この偉大な皇帝が敷いてくれた道を歩んで来ました。われわれの大いなる発達も，この偉大な思想の果実にほかなりません。ピョートル大帝によって作られたロシア国民ほど，自惚れることの少ない国民はありませんでした。この非凡な人物のすぐれた英知は，何がわれわれの出発点たるべきかを完全に洞察していました。彼は，われわれには歴史的条件が完全に欠如していたこと，したがってこのような空虚な基礎の上にわれわれの未来を建設することはできない，ということを見抜いていました。さらに彼は，古きヨーロッパ文明に直面したわれわれが，自らの歴史の中で窒息してしまうか，それとも民族的

1) サンクト・ペテルブルグのブルグはドイツ語に由来する。
2) ツァーリの称号をインペラートルに変えたことをさす。しかし正しくは，ピョートル以後歴代のロシア皇帝はツアーリとインペラートルの二つの称号を併せて用いた。

偏見の世界に落込んで，偏狭な地方的見解を持ちつづけて，西洋の諸国民と同じように，遅々として歩むほかはないだろうということを，理解していました。したがって彼は，われわれに必要なのは，自発的跳躍によって，自分たちに予定されていた運命をかなぐり捨てることだということを，予見していたのです。そこで彼は，歴史的社会の足枷となってその進行を妨げているあらゆる先例をわれわれから取除き，われわれの知性を人間の中のすべての偉大で美しい思想に向って開かせ，幾世紀もかけて作られた全西洋をわれわれに引渡し，その歴史を歴史として，その未来を未来として，われわれに与えてくれたのでした。

もし彼が，その国民の中に豊かな歴史や，生き生きとした伝統や，深く根づいた制度を見出していたならば，はたしてためらうことなく，この国民を新しい世界に投じて，その国民性をかなぐり捨てるように仕向けたでしょうか？　いや反対に，この国民性そのものの中に，民族再生の手段を求めなかったでしょうか？　一方国民も，自らの過去を力づくで奪われ，いわばヨーロッパの過去を押付けられることに対して，苦痛を感じたりしたでしょうか？　しかし事実は，そうではなかったのです。ピョートル大帝がこの国民の中に見出したのは，白紙でしかなく，彼はその上に，ヨーロッパと西洋を書き込んだのです。そして，その時以来，われわれはヨーロッパと西洋に属するようになったのです。しかし，思い違いをしてはなりません。彼がどれほど天才だったとしても，その事業を達成することができたのは，過去の歴史が国民に進むべき道を不可避的なものとして命ずるというようなことがない国だったからこそ，はじめて可能だったのです。この国民にあっては，伝統が未来を創り出す力もなければ，一人の大胆な立法者が，民族の思い出を消し去ることも容易にできたのでした。われわれがあれほど従順に，自分たちを新しい生活に引入れた君主の声に従ったのは，われわれの過去の存在の中に，抵抗を公認するようなものが，何ひとつなかったからです。われわれの社会生活の最も目立つ特徴は，自然発生的だということです。われわれの歴史の中のどの出来事をとってみても，すべて孤立した出来事か，押しつけられたことばかりです。新しい思想といっても，みな孤立した思想であり，輸入された思想なのです。今日と昨日の出来事を結びつける絆が，われわれには生来欠如しています。このような見方に対して，民族的感情から腹を立てたとしても，それが当然だということにはなりません。もしそれが本当だとしたら，真実は受け入れなければなりません。それだけのことです。たとえ人間の論理がわれわれを誤らせたとしても，神の論理はわれわれを見守り，そのめざす所へとわれわれを導いてきました。歴史的に偉大な人物がいるように，偉大な民族が存在します。このことは，われわれの理性では決して説明できませんが，至高なる理性は，神秘の中にそのように定められているのです。くりかえして申しますが，民族的誇り[1]などは，ここではまったく関係がありません。

ある民族の歴史とは，相つぐ一連の事実だけでは決してなく，互いに結ばれた一連の思想でもあります。事実は思想によって翻訳されねばなりません。そしてその時はじめて，人は一つの歴史を持つのです。かくして事実は知性の中にその跡を残し，心の中に刻印をきざんで，失われることがなくなるのです。この歴史は決して歴史家の創るものではな

1) McNally は l'homme national と記しているが Rouleau に従って l'honneur national をとった。

く，事物の歩みが創り出すものです。ある日歴史家が現われて，このすっかり出来上った歴史を見て，それを叙述します。しかし，たとえ歴史家が現われようと否とにかかわらず，この歴史は存在するのであって，各人はその存在の根底にこの歴史を持っているのです。しかして，われわれに欠けているのは，まさにこのような歴史なのです。われわれはかかる歴史なしにやってゆくことを学ばねばならないのであって，この事実に最初に気付いたものを非難することがあってはなりません。わが国の狂信的なスラヴ人[1]たちが，時として，博物館や図書館のために珍らしいものを発掘することがあるかも知れません。しかし，はたして彼らが，われわれの歴史的土壌の中からわれわれの魂の空虚を埋めるに足るものを引出せるかどうかは，疑わしいところです。中世のヨーロッパをごらんなさい。そこでは，いわば絶対的必然と呼べない出来事は，何ひとつありませんでした。中世ヨーロッパの歴史は，どれほど多くの皺を人間の知性にきざみこんだことでしょう！ この歴史こそ，人間精神がその上で活動する土壌を耕したのです。私は，必ずしもすべての歴史が，この驚嘆すべき時代の持つ論理的で厳しい歩みをして来たのではないということを，よく知っています。しかし，ある民族の歴史であれ，あるいは民族の集団の歴史的発展であれ，その真の性格が，中世ヨーロッパにこそ存在するということは，たしかです。そして，このような過去を持たぬ国民が，自らの今後の進歩の基盤を，自分たちの記憶以外のどこかに探し求めなければならない，ということもまた，たしかなところです。決して自分が作ったものではない周囲の状況のお蔭で，また自分が選んだものではない地理的位置のお蔭で，ある国民が自ら為しているところも知らずに広大な土地に広がり，それが突如として強力な民族になったとしたら，たしかにこれは驚くべき現象にあり，人びとは沈黙のうちにこの民族を感嘆して眺めるかも知れません。しかし歴史はこのことについて何といったらよいでしょうか？ この民族の歴史は，いかに漠然とした本能であれ，諸民族をそれぞれの運命へと導く不屈な本能をもって，自らに実現すべく託された思想を追求し始めた時に，そしてそれをわがものとした時にこそ，はじめて始まるのです。今こそ私は，祖国のために，この大切なことを心から呼びかけるものです。そして私は，この高度に学問の発達した時代に住んでいる貴方がたが，私にどれほど聖なる祖国愛に燃えているかを見せてくれたばかりの親しき友であり，同胞である貴方がたが，この仕事に着手することを，見たいと思っています。

世界はいつの時代にも，東洋と西洋の二つに分かれていました。これは決して地理的区分ではなく，知的存在の本質そのものに由来する自然の秩序なのです。これはまた，自然の二つの力に対応する二つの原理であり，人類のすべての営みを包括する二つの思想でもあります。東洋にあっては，人間精神は自らの行動の中に閉じこもり，集中し，静思するところに，その力を見出します。しかるに西洋においては，それは外へと拡大し，あらゆる方向へ広がり，すべての障害と戦いつつ発達します。社会も当然，この基本的事実の上に形成されました。東洋にあっては，思想は自らの中に引きこもり，安らぎの中に避難

1) ここでチャアダーエフは nos slavons fanatiques という言葉を用いている。このときには未だ slavophile という言葉はなく，内容的にも20-30年代のポゴージンやシェヴィリョフら，偏狭な国粋主義者を意味していたものと解される。Cf. McNally, *Major Works*, p. 253, n. 6. なおケネーは，シュヴィリョフを長とする《московский наблюдатель》のグループをこれにあてている。Cf. Quénet, *op. cit.*, p. 264.

し，砂漠の中に隠れ，社会的権力が地上のすべての富を所有するがままに放置してきました。西洋においては，思想は至るところに進出し，人間のあらゆる欲求を包摂し，すべての幸福を希求し，権力を法の原理の上に築いてきました。それにもかかわらず，東洋にあっても西洋にあっても，生は強く豊かであり，人間の知性が，高い望みや深い思想や崇高な創造物に欠けるということは，決してありませんでした。最初に来たのは東洋でした。それは自らの静かな瞑想の中から光の波を地上に注ぎかけました。ついで西洋がその巨大な行動力をもってやって来ました。その生き生きとした言葉は，自らの仕事をしっかりと把握し，東洋が始めたことを完成し，それを自分の広い包容力の中に包み込みました。しかし東洋においては，時代の権威の前に跪いた従順な知性は，その絶対的服従のために世界史の初期に衰弱し，自らに用意されていた新しい運命に気づくこともなしに，ある日，動かなくなり，沈黙してしまったのです。しかるに西洋にあっては，知性は理性と神の権威の前のほかに身を屈することなく，未知なるものの前のほかに立ち止まることもなしに，常にその目を限りない未来に向けて，自由に誇らしげに前進してきました。西洋では，知性は今日なお前進しています。そしてわれわれもまたピョートル大帝以来，この知性と共に進んでいると信じてきました。このことは貴方がたも御存知の通りです。

ところが，わが国には新しい学派[1]が出現しました。彼らは，もはや西洋を欲することなく，ピョートル大帝の事業を覆えすことをはかり，再び砂漠の道をたどろうとしています。彼らは，西洋がわれわれに為してくれたことを忘れ，西洋を罵倒します。われわれを再生させた偉人や，われわれを教育してくれたヨーロッパの恩を忘れて，この偉人とヨーロッパをともに否定しています。彼らは申します。われわれはいかなる必要があって，ヨーロッパ諸国の中に文明を求めたりしたのか？　時の流れに身をまかせておけばよかったのだ。きっとわれわれは，これらの誤りと虚偽に陥っていた諸国民を追い越していたことだろう。どうして西洋を羨む必要があっただろうか？　宗教戦争や異端審問や法王やイエズス会士といった，まったくもって結構な西洋を羨んだりすることは，何もなかったのだ。科学と偉大な思想の祖国は，西洋ではなくて，東洋なのだ。われわれは自分たちが至るところで接触しているこの東洋，自分たちの信念や法や美徳といった，われわれを世界で最も強力な民族に作り上げたすべてを引出してきたこの東洋にこそ，復帰すべきなのだ。いまや老いたる東洋は立ち去らんとしている。されば，その当然の相続者であるわれわれこそが，東洋がかくも長期にわたって保持してきた深く偉大な真理を，人類の幸福のために永続させなければならない。それがわれわれの仕事なのだ，と。いまや貴方がたは，先日私を襲った雷雨[2]が，どこからやって来たかおわかりでしょう。そしてそれがわれわれの間で，当然の反作用を起こしていることも，ごらんの通りです。しかし，今回の衝撃は，上からのものではありません。反対に，今日ほど社会の上層において，わが国を再生させた偉大な人物[3]の思い出が尊ばれている時はありません。従って，発端はあくまで，すべてこの国に由来するものです。わが国民の解放された理性の最初の行為が，われわれをどこへ導くかは，それこそ神のみぞ知るところです。しかし，もし人が自分の国を本当

1) 前ページの注参照。
2)『哲学書簡（第一）』の発禁処分と，チャアダーエフに対する「狂人」の宣言をさす。
3) ピョートル大帝をさす。

に愛するならば，今日までわれわれの栄光や幸福を作ってきたすべてのために，わが国の最も進歩した人たちのこの変節を悲しまずにはいられません。そしてこの奇妙な現象を理解せんと努めることは，よき市民の義務でもあります。

われわれがヨーロッパの東に位置していることはたしかです。しかし，だからといって，決して東洋の一部ではありませんでした。たったいま見たように，東洋は天地創造の日から，人間精神に刻み込まれた思想を所有して来ました。これは時とともに知性を大きく発達させた，豊かな思想です。この思想は社会の最上層の精神的原理を確立しました。それはまた，あらゆる権力を時間の法則という侵すことのできない法則に従わせ，社会的ヒエラルキーを深く理解しました。この思想はまた，たとえ生を限られた範囲の中に拘束したとはいえ，生をあらゆる外的作用から守ったのでした。しかし，われわれにとって，すべてこれらは，まったく無縁なことでした。わが国においては，精神的原理が社会の頂上に据えられるといったことは，一度たりともありませんでした。時間の法則や伝統がわれわれを支配したこともありませんでした。われわれは社会的ヒエラルキーを持ったこともありませんでした。要するに，生が独立的であったことは，わが国では一度もなかったのです。せいぜいのところ，われわれは北方の一国にすぎず，思想からしても，気候からしても，われわれはあの薫たかきカシミールの溪谷や，聖なるガンジスの岸辺からは，遠く隔っているのです。わが国のいくつかの県が東洋の諸帝国に隣接していることはたしかですが，しかしわが国の中心は決してそこにはなく，われわれの生活もそこにはありません。そして，もしも地軸がずれたり，新しい天変地異が起こって，南の自然を北極の氷の中に再び投ずるようなことがなければ，今後ともそのようになることはないでしょう。

問題は，われわれが未だかつて一度たりとも，自らの歴史を哲学的観点から考察しなかったところにあります。われわれの過去の生活の大事件が，その本質を明らかにされたこともなければ，偉大な時代がまじめに評価されたこともありませんでした。われわれの奇妙な空想は，すべてこのことから来ています。今から50年ほど前に，ドイツ学者達[1]がわが国の年代記作家を発見しました。ついで，カラムジン[2]が，その荘重な文体でわが国の君主たちの事績と行動とを記述しました。しかるに現在では，これらドイツ人の学問も，すぐれた作家の文体も持っていない凡庸な作家たちが，誰ひとりとして思い出も愛情も抱いていない時代と風俗を描いています。以上がわが国史研究[3]の簡単な総括です。このような取るに足りない仕事から，偉大な国民にその運命を予感させうるものを引き出すことは，まずもって出来ないところだということは，認めねばなりません。しかし現在問題なのは，まさにこのことであって，今日の歴史研究の全関心は，まさにかかる業績に向けられているのです。現にわれわれが生きているこの時代の真剣な思想が求めているものは，

1) 18世紀にロシアの年代記を研究したドイツの学者たち Bayer, Schiller, Miller, とくに *Sammlung russischer Geschichte*, St. Petersburg, 1732 の著者である Gerhard Friedrich Müller (1705–83) と *Probe russischer Annalen*, Bremen und Göttingen, 1768 を著わした August-Lndwig Schloezer (1735–90) をさすものと思われる。Cf. McNally, *Major Works*, pp. 253–254.

2) カラムジンとチャアダーエフの関係については拙稿「『哲学書簡』から『狂人の弁明』へ」，330–331ページ参照。

3) マックノーリーは，その代表として，ニコライ・ポレヴォーイとミハイル・ポゴージンの著作をあげている。McNally, *ibid.*, p. 254.

きびしい省察であり，生が多少とも明瞭にある民族に現われた瞬間を，私心なしに分析することなのです。なぜならば，ある国民の未来とその可能な発展の諸要素とは，まさしく，そこにあるからです。たとえ自らの歴史の中に，このような時代がいかに乏しかろうと，また生が必らずしも強く豊かでなかろうとも，真理を斥けたり，虚偽を糧とするようなことがあってはなりません。また，墓から墓へ重い足取りで歩いているだけなのに，生を全うしたなどと思い込んではならないのです。そして，そのような省察と分析のあとで，もし貴方がたが，この虚無を越えて，国民が本当に生きていると感じた瞬間，民族の心が鼓動し始めた瞬間に出合ったなら，もし自分の周囲に民衆の波が高まり，どよめくのを聞いたなら，その時こそは立ち止って，深く考え，研究すべきなのです。そうすれば，貴方がたの努力は無駄に終らず，自分の国が隆盛期には何を為しうるのか，また未来に何を期待しうるのかを，知ることができるでしょう。わが国にあっては，かかる時代とは，たとえばあの空位時代の恐るべきドラマが終った時でした[1]。この時代に国民は，自らの力でその敵を打破り，自分たちに君臨する高貴な家柄を王位につかせました。もし人が，この時代に先立つ何世紀かの空虚さと，わが祖国のまったく特殊な状況とを考慮するならば，これこそ，いくら感嘆してもしきれないユニークな瞬間でした。私が，世人が言っていたように[2]，われわれの思い出をすべて取り去れなどど主張しているのでないことは，おわかりいただけることと思います。私は，ただ自分たちの過去に，醒めた目を向けるべき時が来たといっているにすぎません。しかもその目的は，そこから腐敗した古い遺物や，時代が食らい尽した古い思想を引き出したり，あるいはわが国の諸公の良識がはるか以前に納得した昔の敵対感情をむしかえしたりするためではなく，自分たちの過去から何を引出すことができるかを，知るためなのです。私が未完の論文の中で試みたのは，まさにこのことだったのです。また，あのように奇妙な形で，国民の誇りを刺戟したこの論文の一部[3]は，全体の序論とも言うべきものでした。この心から湧き出た思想の，最初のほとばしりは，たしかに熱烈にすぎ，また表現には焦燥が，思想の根底にはある程度の行き過ぎがありました。しかし，この小論文を支配していた思想は，決して祖国に敵対的なものではなく，烈しい言葉で表現された陰欝な悲しみであって，決してそれ以上のものではなかったのです。

どうか，私が誰よりも祖国を愛していることを，信じて下さい。私は自らの国民の光栄を強く望み，そのすぐれた資質を認めています。しかし，私を駆り立てている愛国的感情が，あの大きな叫びで私のおぼろげな存在をひっくり返し，十字架の許に打ち上げられていた私の小舟を自分たちの苦悩の大洋へと追い返した人びとの愛国心とは，完全に同じものでないということはたしかです。私は自らの祖国を，目を閉じ，頭をたれ，口をつぐむ，といったやり方で愛することは，決して学びませんでした。私は，人が自らの国に有益であり得るのは，それをはっきり見る場合だけだと考えています。私は，もはや盲目的愛の時代は過去のものになり，いかなる狂信も時代遅れになっていると信じています。私は，ピョートル大帝が私にそうするように教えてくれたやり方で，自分の国を愛していま

1) 動乱時代が終って，ミハイル・ロマノフが即位した時点をさす。
2)『哲学書簡（第一）』出版の際の世人の批判をさす。
3)『哲学書簡』全八編の中，公刊された第一編をさす。

す。私は，不幸にも，今日わが国の多くの思慮ある人が陥っている，あの怠惰で，すべてのものを美しく見せるように作られた，幻想の上にまどろむ，ひとりよがりな愛国心は持ち合せていません。私は，もしわれわれが，他の国民よりも遅れて来たとしたら，それは彼らの迷信や無分別や閉塞状態に陥ることなく，彼らよりも，よりよく為さんがためだと思っています。もし，われわれよりも恵まれない国民が被らねばならなかった長期にわたる多くの愚行や災難を，所詮われわれも繰返さねばならないのだとしたら，それは，われわれに割当てられた役割を，奇妙にも無視することになりましょう。われわれが，自国の置かれている立場を評価することができるならば，それはわれわれの恵まれた状況です。また，われわれが，世界をおかしている憐むべき利害関係や，気ままな情熱から解放された高邁な思想をもって，世界を判断し，凝視することができるならば，それは素晴しい特権だと考えます。それだけではありません。私は，われわれが，社会の秩序の大部分の問題を解決し，古き社会に生まれた殆どの思想を完成させ，人類を悩ましている重大問題に発言すべく運命づけられているのだと，心から確信しています。私はこれまでにもしばしば申しましたが，われわれは世界の偉大な法廷にかかっている幾多の訴訟事件の真の陪審員だということを，繰返し述べたいと思います。

多分私は，あれらの国を誉めすぎました。しかし，それでもやはりあれらの国が，すべての文明の中で最も完璧な模範であることにかわりありません。だが今日，そこで起こっていることを見てごらんなさい。一つの新しい思想が現われるや，社会の表面のあらゆるエゴイズムや虚栄心や党派心が，それに飛びかかり，ひき捕え，押し歪め，作り替えてしまいます。そして一瞬の後には，この思想は，これらの様々な力によって打砕かれ，ついには抽象の領域へと運ばれ，その上に人間精神の不毛な塵が積み重ねられることになるのです。しかるに，わが国には，このような一方的な利害や，既成の世論や，根深い偏見といったものは存在しません。われわれは一つ一つの新しい真理に対して，新鮮な精神をもって接します。わが国の制度や，君主の自発的に為した事業や，未だ出来てから一世紀にも足りぬ風習や，さらには今日なお些細な事に拘泥している世論の中にさえも，神の摂理が人類に与え給うたよきことに反するものは，何ひとつ存在しません。われわれの間では，最高の意志が発言すれば，それだけであらゆる意見が消え去り，すべての信念が道をゆずり，あらゆる精神が自らに示された新しい思想に向って開かれます。多分，われわれもまた，他のキリスト教国民が経験したあらゆる試みにあい，彼らと同様に，そこから新しい力やエネルギーや方法を汲み取ることができ，さらにその上で，われわれの孤立した立場が，彼らの長い教育に付随した災難からわれわれを守ることができたならば，その方がよかったかも知れません。しかし，現在問題なのはそのことではありません。問題はわが国の真の性格を，自然の理が変えることの出来ぬものとして与え，定めた如く，しっかりと把握し，そこからあらゆる利益を引き出すことにあるのです。もはや歴史がわれわれのものでないことはたしかです。しかし知識はわれわれのものです。われわれには人間精神のすべての営みを再び始めることはできないでしょうが，しかし将来の営みに参加することはできます。過去はもはやわれわれの力の及ぶところではありませんが，未来はわれわれのものです。

世界がその伝統に押し潰されそうになっていることは，疑いもないところです。ですから，世界が悪戦苦闘しているこの狭いサークルを羨むことはやめましょう。確かに，すべての国民の心の中には，現在の生活を支配している過去の生活についての深い感情と，現在の日々を満たしている過ぎ去った日々についての決して忘れることのできない思い出とがあります。しかし，われわれとしては，彼らがその冷酷な過去と戦うなら，そうさせておけばよいのです。われわれは一度たりとも，歴史的必然の支配の下で生きてきませんでしたし，またどれほど強力な法といえども，時代がこれらの国民の前に掘った深淵にわれわれを突き落すこともありませんでした。いまやわれわれは，自分たちが知らなかった暗い運命に身を委ねたりはせずに，自分たちがたどるべきだと知っている道を前進し，啓発された理性と思慮に富む意志の声にのみ従うことができるという，この大きな特権を享受しようではありませんか。われわれには絶対的必然などまったく存在しないということ，またわれわれは，幸いにも，他の諸民族をその未知の運命へと追いやっている急な坂に位置していないのだということを，自覚しましょう。われわれは自分たちの一歩一歩を測ることができ，自分たちの知性に触れる一つひとつの思想に判断を下すことができるのだということ，さらにまた，進歩の宗教の熱心な司祭が夢見るよりも，もっと大きな成功を望むことが許されているのだということを，はっきりと認識しようではありませんか。

それでは私が祖国に示しているのは，貧弱な未来でしょうか？　私が喚起しているのは，栄光のない運命でしょうか？　しかしながら，私が実現すると信じているこの偉大な未来，疑いもなく成就するであろうと考えているこの美しい運命は，ロシア民族のこの性質，この特性の結果にすぎません。そしてそのことを，私はあの不幸な論文[1]の中で指摘したのでした[2]。(しかし，本当に人はこの論文がどんなものだったか知っているでしょうか？　これは何年も前に，苦しい気持と深い絶望の中で書かれた，ある婦人へ宛てられた私信だったのです。そしてある慎みのないジャーナリスト[3]が，その虚栄心からそれを公刊したのでした。しかしこの論文は，印刷されたつたない翻訳よりも，原文の方がはるかにきびしいものでしたのに，何度となく多くの人に読まれた時にも，たとえ偶像のように祖国を崇拝している人に読まれた時でさえ，決して反感を買ったりはしませんでした。たしかにこの中の夢中で書かれた幾頁かの中には，西洋諸国の優越性という古い主題が，ややもすると熱っぽく，多分誇張して述べられている，歴史研究の部門が挿入されています。以上のようなものが，その著者に，大衆の非難ときわめて奇妙な迫害とを招いたこの忌むべき論文，この煽動的な小冊子の内容だったのです。)

いずれにしましても，私はできるだけ早い機会に，このことを申したかったのです。そして今や，このように告白することができるのを嬉しく思っています。確かに，この偉大な民族に対するこの種の告発には，多少の言い過ぎがありました。なぜなら，この民族の唯一の過ちというのは，結局のところ，あらゆる文明が自然に集まる中心や，何世紀にもわたって文明の泉が溢れ出る源泉から程遠い，文明世界の果てに追いやられていたことだ

1)『哲学書簡（第一)』をさす。
2) 以下のかっこの中の文章は，原稿では棒をひいて消されており，ガガーリン版にも，ゲルシェンゾン版のヴァリアントにも入っていない。「解説」参照。
3)『テレスコープ』の編集者であったナジェージヂンをさすものと考えられる。

けだったからです。またわれわれが，かつて帝国が栄えたこともなければ，何世代もの人びとが敬愛したこともない，不毛の土地に生まれたという事実を認めなかった点でも，多少の行き過ぎがありました。この土地では，過ぎ去った時代がわれわれに語る何ものもなければ，先にあった文明の痕跡も，いかなる思い出も，消え去った世界の記念碑も，何ひとつないのですから。さらにまた，われわれの年代記のわびしさを慰めてくれる唯一のものである，この謙虚にして，時として英雄的ですらあった教会のことを考慮に入れなかったという点でも，不当なところがありました。なぜならば，われわれの父祖の勇気ある行動や美しき献身的行為の名誉は，すべてこの教会に帰せられるからです。最後として，たとえ一瞬といえども，ピョートル大帝の偉大な魂[1]をその胎内に持った国民に絶望したという点でも，たしかに行き過ぎがありました。しかし，それにもかかわらず，わが国の大衆の気まぐれと移り気とは，まったく合点のゆかぬところだったと言わなければなりません。

ところで，この問題の論文が出版された数日前に，新しい戯曲[2]が上演されたことが思い出されます。未だかつて，国民がこれほど烈しく打ちのめされ，これほどひどく名誉を傷つけられたこともなければ，公衆がこれほど辱しめを受けたこともありませんでした。しかしまた，これほど上演が成功を収めたこともありませんでした。

〔チャアダーエフが加筆訂正した原稿はここで終っており，以下はガガーリン版とゲルシェンゾン版（第一巻）に収録された部分である[3]。〕

それならば，自分の国とその歴史と民族の性格について，深く思いをこらした真面目な精神は，自分の胸を締めつけている愛国的感情をば，道化役者の口を通して語らせることができないからという理由で，沈黙の刑を言い渡されなければならないのでしょうか？ いったい，何がわれわれをして喜劇の皮肉な教訓にはかくも好意的で，事柄の本質をつくきびしい言葉に対してはこれほど怒りやすくしているのでしょうか？ それは，われわれには未だ本能的な愛国心しかないからです。そして，われわれのこの本能というのが，学問的な省察と文明によって啓発され，知的な仕事を通じて成熟した古い国民が持っている，あの熟慮された愛国心とは程遠いものだからです。さらにまたその理由は，われわれが未だ思想的に苦しんだことがなく，世界において果たすべく運命づけられている役割や自らに属する思想を探し求めている若い民族のやり方でしか，自分の国を愛していないからです。それはまた，われわれの知的な力が，ものごとに真剣にぶつかって鍛えられたことが未だほとんどなかったからです。一言で申しますなら，その原因は，今日までのところ，われわれの精神的働きがほとんど皆無に等しかったからです。われわれは驚くべき速さで，ヨーロッパが当然に感嘆したほどの一定の高さの文明に到達しました。わわれわれの力は世界の脅威であり，わが帝国は地球の五分の一にわたって広がっています。しかし

1) ガガーリン版とゲルシェンゾン版（第1巻）には，このあと「ロモノーソフの普遍的精神とプーシキンの優雅な才能」という言葉がある。「解説」参照。
2) ゴーゴリの『検察官』をさす。チャアダーエフがここで書いているのは，1835年12月2日のモスクワにおける上演と McNally は推測している。しかし，もしそうなら数日前ではなく，数カ月前ということになる。McNally, *ibid.*, pp. 255-256.
3) マックノーリー版には，以下の文章は収められていない。「解説」参照。

すべてこのようなことは，わが国の君主の精力的意志によるものであり，またわれわれが住んでいる国土の地理的条件に助けられているからです。

われわれが偉大な国民になったのは，君主と風土によって鍛えられ，鋳型に入れられ，作られた上で，服従することに慣れてきた結果にほかなりません。わが国の年代記の最初から最後までざっと目を通してみて下さい。どのページにも，権力の力強い働きや風土のたえざる影響は見られますが，民衆の働きはほとんどまったく見られません。しかし，それにもかかわらず，ロシア国民が自らの権力を君主の手に委ね，自らの国の自然に譲渡しながらも，高い英知を証拠立てていることも，たしかだと言わねばなりません。彼らはこのようにして運命の至高の法則を認識してきました。この事実は，自らの存在を無理に曲げたり，自らの可能な進歩の原理を抑圧することなしには是認し得ない，異なった秩序の二つの要素の奇妙な結果というべきです。そして，現にわれわれが置かれている立場からわが国の歴史を一瞥することによって，この法則の全貌が明らかになるならば，それは望ましいところだと私は考えています。

II

われわれの歩みを何世紀にもわたって支配している一つの事実があります。この事実は，いわばわれわれの全哲学を包含し，われわれの社会生活の全時代に現われ，社会の性格を決定してきました。これはまた，われわれの政治的偉大さの基本的要素であると同時に，われわれの知的無能の真の原因でもあります。その事実とは，地理的な事実であります[1]。

1) ガガーリンのの注によれば，原稿はここで中断しており，はたしてこのあとに続きがあるか否かについては，まったく不明である。